



2023

内容見本

はなごよみ

目次

特輯 「正字・正かな」の未来

向かひ風、時々追ひ風

押井徳馬

4

当業者から歴史へ

bluesday

8

正字正假名の将来について

春眠猫

10

舊字を扱ふこと

ロナルド始澤

12

愚想の寄せ集め 其の三

名賀月晃嗣

14

歩みの念 第七章

明日横悠

20

書評

明日横悠

30

A型作業所年報

刑部しきみ

31

めだかを飼ふ

bluesday

40

原稿を書いてみませんか

44

表紙

コシヌケ1040

向かひ風、時々追ひ風

押井徳馬

昭

和二十一（一九四六）年の「当用漢字表（現・常用漢字表）」「現代かなづかい（現・現代仮名遣い）」に

始まる國語改革は、一見「簡單で憶えやすい國語」に見えた反面、根幹をなす原理原則はすつかり亂れ、破壊されたまま、日本の國語にすつかり根を下ろしてしまひました。

略字とは「使用頻度が高いほど省略されがち」なもので、たとへば「佛・拂・沸・費」の「弗」は前二者だけ「仏・払」とされ、残りは「沸・費」のまま。「文字部品の共通性」が分かりづらくなつたまま「正式な字」にされました。

かなづかひは、特に「じ・ぢ」「ず・づ」の書き分け規則が問題で、たとへば、「もと十つく」もとづく」「にい十つま」にいつま」と書くのに、「つまづく」「いなづま」は二語に分解出来ないとなして丸語記を求めてゐます。

そして何百年もかけて育て上げられてきた、「正字・正かな」または「舊字・舊かな」と呼ばれる、それまでの國語表記は國民の記憶から徐々に忘れられてゐます。從來の「正字・正かな」で書かれた本が改版と共に「新字・新かな」に置き換はり、街中で目にしなくなつてきただけに留まらず、「その表記の背景にある物の考へ方」や「細かな運用ノウハウ」が忘れられつつあります。

しかし、こんな現状を「仕方ない」と諦めてこなかつた人々は細々と存在し續けてきました。昭和三十四（一九五九）年に設立された「國語問題協議會」もさうですし、本誌の執筆陣にもあるやうな「歴史的かなづかひをインターネットで實踐する人々」もさうです。そして現代は我々にとつて「向かひ風」もあれば「追ひ風」もある時代です。

向かひ風

追ひ風

●「常用漢字・現代仮名遣い」といふ既成事実が残つてしまつた上、從來の表記の名譽恢復がされてゐない ●漢字廢止論者・表音主義者の目標のうち、通らなかつたのは「漢字の全廢」「假名遣の完全表音化」「縦書きの全廢」位で、他（漢字制限とそれに伴ふ宛字や交ぜ書き、略字體を正式な字に格上げ、假名遣表音化、文語文の口語化、文書の横書き化推進）は概ね通つてしまつた	●かな漢字變換やドットフォントの發明と教育の向上により、タイプライターや教育向上の爲の「漢字制限」「假名遣表音化」の主張が説得力を持たなくなり下火になつた ●漢字制限の形骸化、常用漢字の追加文字が所謂康熙字典體である事により、それらの漢字に含まれる「正漢字と共通の文字部品」に以前よりも慣れ親しんでゐる ●人名や固有名詞に限り、正漢字尊重の風潮になつてきた
●コンピューターフォントの普及により、劃一化された漢字字形が當り前になり、所謂「舊字」や「異體字」に觸れる機會が昔より減り、漢字字形の差に不寛容になつた	●それでも近年は、所謂「中華フォント」により、「一種類ではない漢字の多様な字形」の存在に少しは慣れてゐる（註・中華フォントは正漢字の活字體と極一部が一致するものの、私が手放して肯定するといふ意味ではない）
●「舊字・舊かな」と言つて意味がすぐ通じ、概念も殆どの人が体感で知つてゐる時代が過ぎ去つた ●戦前の正字・正かなによる教育を受けた人から直接教はつたり、見て盗んで憶える機會が激減した ●新舊字體對照表を見る機會が減つた	●「舊字・舊かな」を知る爲の資料、たとへば新舊字體對照表、漢字の部首檢索、假名遣のテキスト、正字・正かなの生きた用例等がコンピューターやインターネットでいつでも見られるやうになつた
●「舊字・舊かなは古臭い」「古文専用」といふ印象が今なほ消えてゐない	●「舊字・舊かなは古臭い」といふ印象がある反面、「古風な味はひ」としてはポジティブに見られ、「古風で非日常的な分野」では今なほ愛されてゐる

歩みの念

文：明日楨悠

七

穏やかな午後、錦秋の山々がつつく絵巻物の景色をゆく影は二組。

手前を動く影は、御輿を担つてゐる若彦と千禰。銀に生茂る薄原が、彼等の道ともう一方の山際の道とを分け隔ててゐる。つと、秋風が立つて一斉に穂を靡かせた。思はず男女は歩調を緩める。あたかも手巾を振るふらしい薄の合間から、山際の道を晴れ着の行列が敵かな足取りで横切つていくのが見えた。

「あれは？」

ひそめた眉に手を翳して見遣る若彦に、千禰がはしやいだ声をかける。

「ほら！ 結婚式」

「どれどれ？」

進路を逸れた二人は、赤蜻蛉をまねて飛べないゆゑ、すきを折り敷いて嫁人行列へと近づいていく。

燃え立つ紅葉の下で、手に手に朱傘を振り上げる参列者の陣頭を闊歩するのは、うら若き白無垢の花嫁を載せたたくましい栗毛の駒である。この傍らで牽き綱を取る好青年こそ花智であらう。神前にて契を交したばかりの夫婦が、婚家へと仲人たちを伴つていく図か。

祝ひつつ道端から見送つてみると、山高帽の紳士が行列の殿を離れて、二人に近寄つてきた。

「若彦さんと千禰さんですか」

吃驚してももの云へない二人へ、紳士は更に續けて、「これから披露宴を行いますから、あなたがたも是非おい

で下さい」

思ひも寄らない招待とともに山高帽は人々の流れの間へ戻っていき、残された二人とも狐につままれたやうな顔を見合はせた。

束の間きこちなく視線を交はすが、逡巡する相手の恍惚表情に、若彦はぷつと吹き出した。むっとしてみせる千禰だが、つい釣りこまれて笑みをこぼす。

「行ってみようぢやないか。お呼ばれしたみたいだし」

彼等は御輿を支へる手と手の絆をきりと引締めて、めでたき列の最後尾につく。

よどみなく風を切る紋付の背中。通りすがる人が道の左右に分かれ、新婚夫婦に向かって口々に「おめでたうございます」と声をかける。

「おめでたう」

「おめでたうさんです」

「よかったね」

祝福の雨。山際の道には蔭日向、どんぐり、毬栗や、黄や赤の落葉が散り敷いてゐる。少年たちがついてきてそれらを手で掬ひ、御輿を運ぶ二人の上に振りまいた。

「おめでたう」

櫟林の辺りで石地藏が佇んでゐる。その側には熟れた山姫が実ってゐる。櫟の下を嫁入行列が通り過ぎる。山姫

は少年にもいで行かれた。

「おめでたう。御姉妹でせう。違ふ？ 先の花嫁さんと面差しが瓜二つだから」

くづれかけた標石のところ、女の人がさう話した。天邪鬼な小童が後ろから「ひとつも似てない。ケツケツ」と囁きたて、びよんぴよん木の葉の絨毯を踏み鳴らした。御輿はかるく左右に揺れて運ばれゆく。

行進は瀟洒な町の通りに掛かった。山間に興された古の香を今に伝へる城下町だ。そのかぐはしきを風向からたどると金木犀の花に行き当たる。燦然たる陽の色を封じ込めた細かい粒が連なり蒐まって出来た気品だ。

「おめでたう、おめでたう」

きつと嫁入はこの町の風物なのだらう。誰もが呼吸するやうに当り前に欣びを共にするのだから。

お嫁さんは花賀殿の引く馬の背に揺られながら、山治ひの大きなお屋敷に入っていた。朱傘を翳した人々も、山高帽の紳士もこれに續く。憚り乍ら若彦と千禰も長屋門をくぐった。

邸内に出迎へた松の木が恰も矢印のやうに右に傾いでをり、先方の人々は皆そちらへ廻っていく。広大な庭苑にさまよひ出るや、放牧した羊のやうに行列は散った。披露宴の会場はここだ。巧みに刈られた青い芝生に丸卓子を設へ

千禰ちねの説せつに依よるならば、この襖絵ふすまゑには立夏りつか、小満せうまん、芒種ぼうしゅ、夏至げしが描えがかれてをり、小暑せうしよ、大暑たいしよは省はぶかれてゐることになる。これは有力うりよくな見方みかただけれども、「さういへばさう見える」以上の結論けつろんには中々なかなか至いたらない。

試ためしに、若彦わかつひこはここから更に北側きたがはの襖ふすまを開あけようとした。が、開あけなかつた。

「どこを開あけてもいって話はなしだったけど、開あかない襖ふすまもあるんだな。西にしが渡り廊下わたりろうかか。どうか。一旦いつたん考かんがへを整理せいりしたいし、外そとの空くう気に当あたつてこようか」

「いいですよ」

外そとへ出でるなり、清涼せいりやうな空くう気が肌はだにあたつて思おもはず身震みふるひした。母屋おもやへの渡り廊下わたりろうかは木橋もくけうのやうな造りつくで地上ちじやうから少し浮うき上あがつてゐる。欄干らんかんに触ふれてみると、しっとり夜露よつゆに濕しめつてゐた。若彦わかつひこはそこから庭にはの北側きたがはを覗のぞいてみた。節氣殿せつきでんの向むかうは、ただ暗くろい山陰やまかげが壁かべのやうに立ち塞ふさがつてゐるだけで、殆ど何なにも見えなかつた。語かたりかけてくるのはこほろぎや松虫まつむしと、お屋敷やしきからの遠とほい喝采かっさいばかり。

Passage

もう半周はんしゅうした。
若彦わかつひこ、千禰ちねはそれなりに縁えんを掴つかみ機きを運び、何とか善処ぜんしよ

してゐる。
未来みらいの詩人しじんの箴言しんげんに曰いはく、

Faire la moitié du travail. Le reste se fera tout seul.

續つづけてゐる仕事しごとには熟じなれるべきである。
転ころぶ虞おそれを勘案かんあんしつ、若彦わかつひこ、千禰ちねに更さらなる早足はやあしを促うながさんと思惟しゐする。
節氣殿せつきでんに戻もどつた若彦わかつひこ、千禰ちねは、残のこる秋あきの間まと冬ふゆの間まをもう一周いっしゅうし、二十四節氣にじふせつきと襖絵ふすまゑの関かんはりを充分じゅうぶんに檢証けんしやうした。その成果せいこを文字もじによつて図づに示しめすと次の通つぎりとなる。

【節氣殿圖】

芒種 暑処 白露 小満 立秋 分冬 立冬 大雪 夏至 立春 冬至 雨水 啓蟄

しはざき

渡り廊下

土旺どわうの間まを見みつけんとする諸氏しよしは、図中づちゆうに印しるしを附つけ給たまへ。

A型作業所年報 二〇二二年一月〜十月

文・刑部しきみ

■前同までのあらすぢ

金に困つて泣く泣く労働を選択した年金受給者である刑部しきみ、四十歳。獨身、子供部屋をばさん、統合失調症、糖尿病。何うみてもメンヘラの成れの果てが、求人誌で募集がかかつてた就労繼續支援A型事業所、通稱「A型作業所」に於いて最低時給で四時間程就労すると云ふワーキングメモリーエッセイ！泣いても喚いても地獄の様に襲ひかかる軽作業！迫りくる納期！メンヘラをばさんの明日はどつちだ！

作業所軽作業篇

■コロナだ！在宅ワークだ！でも何するの？

在宅ワーク。甘い響きである。甘い響きに聞こえるかどうかは各々、考へて頂きたい。考へて分かるものでもない

かもしれないが、かつて私は在宅ワークなるものをした事がある。家でHTMLやCSSを書いたり、デザインを切つて使へる様にしたりとか、いろいろしてゐた。さう、色々。そんな會社と價值觀の相違で離職してから、私のメンタルヘル生活はまさに始まつたと云へよう。世はまさに大失業時代。半分無職みたいなものだつた存在がたうとう無職になつてしまつて、年金を貰ひながら實家に寄生し、老いた親の脛を齧り、理解ある伴侶もをらず、細々とやつて行くしか無いのであつた。云々。

何を云ひたかつたかを見失つてしまつたのだが、とにかく一月の初めに、電話で以て、例の新型コロナウィルスの所爲で、在宅作業を偉い指導員さんから云ひ渡されたのである。取り敢へずパソコンはあるかと聞かれたので、有りますと答へたら、では何か本の内容をタイピングさせて、さういふ主旨の云ひ渡しをされる。刑部さんには正直

めだかを飼ふ

文：blueday

このところ、めだかを飼つてをります。

切つ掛けは梅雨も終はつた頃だつたか、家人が知り合ひからめだかを譲つてもらつた事です。これまでも何度かあつたのですが、基本的には家人が片手間に世話をし、また何匹かは更に別の知り合ひなどに譲つたりもします。そのうち寿命かさうでないかはともかく、一匹また一匹と天に召されてゆき、冬が終はる頃には居なくなつてゐる、といつた風な毎度の流れでした。

今回は偶然、譲り受ける場に家人と共に私も居たといふのが、これまでと違つた所でせうか。飛び跳ねんばかりの勢ひでバケツの中を元気に泳ぎ回るめだかの姿を見て、何の気紛れか、ちよいと世話でもしてみようかなどと思つてしまつたのが運の尽き。それから今に至るまで、結構な手間と暇とお金をかけてしまつた様な気がします。以下、そんなあれやこれやの顛末をご紹介します。

貰つたのは二十数匹位だつたでせうか。それなりに黒々としたやつですが真つ黒といふ程でもなく、品種については未だに聞かず仕舞ひのため、その正体は不明となります。おそらく野生のものではないと思ふのですが。

といふわけで、まづはこやつらの住処を用意してやらねばなりません。といつてもそんな大層な代物を用意する訳でもなく、プラスチック製の、本来の用途としては昆虫の飼育に使ふ様な手の容器なんかを買つてみました。しかしこれに入れてはい終はり、では今までと大して変はらず面白味に欠ける。もう少し手の込んだ「あくありうむ」的な奴をやつてみようと思ひ、もう少し気の利いた機材を買ひ揃へてみる事にしました。

とはいへ我が家では設置スペースの関係上、そんな大きな水槽も置けません。デカイ水槽の中を多数のめだかが各々優雅に泳いでゐる姿といふのも見てみたかつた所はあ

原稿を書いてみませんか

中

国語の表記に、中国本土とシンガポールでは使はれる「簡体字」と、台湾や香港では使はれる「繁体字」があるのと同様、日本語の表記にも漢字と仮名についてそれぞれ二種類あります。「正漢字」（いはゆる「旧漢字」）と「新漢字」、「正仮名遣」（いはゆる「旧仮名遣」、「歴史的仮名遣」と「新仮名遣」（「現代仮名遣い」のこと）です。

「正漢字」や「正仮名遣」は、絶滅した国語表記ではありません。過去文献の引用、短歌や俳句をはじめとした芸術において、現代でも細々と使はれてゐます。

現代において、「正漢字」「正仮名遣」を読んだり書いたりする方には、様々な立場の方がいらつしやいます。

- ・過去文献の引用に限り正字や正かなで書きたい
- ・短歌や俳句に限り正かなで書きたい

- ・ブログや芸術作品等を正字や正かなで書きたい

- ・今のところ書く事はしないが、正字や正かなで読みたい

本誌は、そんな皆さんを応援する為に、「全頁歴史的仮名遣（固有名詞や引用文は除く。また、漢字は正漢字を歓迎するが新漢字も可）の同人誌」として毎年発行してゐます。

原稿募集のお知らせ

「正漢字」「正仮名遣」は、読むだけでも十分楽しめますが、実際に書いてみると更に楽しめますし、学ぶ近道でもあります。皆さんも試してみませんか。

『「正字正かな」で原稿を書いても印刷を断られたり、『新字新かな』に直されたりする』のが残念ながら当り前の現

在、本誌は『正漢字』『正仮名遣』の原稿がそのまま掲載される」のが「当り前」の、謂はば「解放区」です！

募集内容

- ・ 毎号のテーマに基づく随筆や論攷等（テーマ投稿）
- ・ 漢字や歴史的仮名遣について、国語国字問題について
- ・ コンピュータで正漢字や歴史的仮名遣を使ふテクニク
- ・ 歴史的仮名遣による詩歌、小説、随筆、漫画等の作品
- ・ 半ページ〜四分の一ページ程度の短いコラム

国語問題に関する記事が多く集まる本誌ですが、テーマや国語問題に関係しない記事もむしろ歓迎いたしますので、お気軽にお書きください。

毎年秋発行、次号〆切は、二〇二三年九月頃を予定してゐます。次号のテーマはウェブサイトで発表予定です。

なほ、執筆者や校正・組版等の作業を手伝ってくださつた方には、完成した冊子を二冊無料進呈致します。

投稿方法

本誌への投稿には、グループへの入会や会費のお支払い

は必要ありません（逆に、原稿料もお出しできません）。ただし、スムーズな聯絡^{れんらく}の為に、原則として電子メールアドレスをお持ちの方に限定致します。「はなごよみ」のメールアドレスまで、ご遠慮なくメールでお問合せください。原稿も、メール本文に書いていただくか、メールにファイルを添付してお送りください。なほ、記事に関するご確認のため、編輯・校正・組版担当者にメールアドレスをお伝へ致しますので、あらかじめご諒承ください。

また、スムーズな編輯・校正の為、以下の情報もメールでお知らせください。

①ペンネーム

- ②掲載ご希望の方はTwitter IDや電子メールアドレス（読者からの聯絡先として、なるべくご記入ください）
- ③ジャンル（解説、評論、小説、詩歌、随筆、漫画等）
- ④内容（国語教育に関するエッセイ、学園もの小説等）
- ⑤未完成の場合は予定文字数（文字数か原稿用紙換算）
- ⑥漢字、仮名遣

（正字正かな・新字正かな・広辞苑前文方式・新字新かな）

正字正かな 「櫻色のバッグを持つてゐる」

新字正かな 「桜色のバッグを持つてゐる」

広辞苑前文方式 「桜色のバッグを持つて居る」

新字新かな

「桜色のバッグを持っている」

↓ 「桜色のバッグを持つてゐる」

に直して印刷

(ご希望により新字正かなではなく正字正かなにも直せます)

⑦捨て仮名(ひらがなカタカナとも使ふ・カタカナのみ使ふ「推奨」・使はない)

ひらがなカタカナとも 「桜色のバッグを持つてゐる」

カタカナのみ使ふ 「桜色のバッグを持つてゐる」

使はない 「桜色のバッグを持つてゐる」

一) 新字正かな兼新字新かなの事。ひらがな・カタカナとも捨て仮名使用推奨。言葉選びの難易度が高いので、歴史的仮名遣に十分慣れた人向けです。

二) 小さい「や」「ゆ」「よ」「う」の事。

ファイル形式

文章は原則としてテキストファイルでお送りくださるか、メール本文にそのまま書きください。ワードや一太郎等ワープロソフトのファイルでも構いませんが、文章校正機能を使用可能なワードまたはLibreOfficeを推奨します。

くの字点(くゝ・くゝ)は「／」「／」「／」で代用しても構いません。「正字正かな」をご希望の方は、コンピュータの一般的な文字コードに無い文字(二点之繞や「示」の形の示偏の漢字等)は新字で代用するか、注意書きを附加してください。編輯時に、フォントに字形のある範囲で、印刷用の正しい字形に直します。

写真やイラストや図ですが、残念ながらカラーは出ません(口絵を除く)。画像ファイルは、原則として文章とは別にお送りください(ワードで位置決めした内容をそのまま使ふのではなく、こちらで組版ソフトを使つて組み直すので、元ファイルが必要です)。また、可能な範囲で、縮小されてゐない、なるべく大きなサイズをご用意ください。なほ、本誌のサイズはA5版です。詳しくはメールでお問合せください。

著作権について

皆様の原稿は、「同人誌(紙版および電子書籍版)」の原稿として「および」必要に応じ、同人誌頒布の際の内容見本として「使用しますが、作者に許可をいただかない限りは、それ以外の目的(他の本の原稿に転用する等)」では使用しません。

また、前述の目的に限って、皆様の原稿を使はせていただきますが、原稿の著作権そのものを譲渡していただくといふ意味ではありません。後でご自分の原稿を（ウェブサイトに載せたり個人誌・同人誌・商業誌に載せる等）どう活用していただくかは、お任せします。

それでは、皆さんの作品を心よりお待ちしております。



本の DIY で……更に表現の自由！

従来は……



~~正漢字・
歴史的
かなづかひ~~

で書くのは
自由でも



→
修正

新漢字・
現代
仮名遣い

に直して
出版します

これからは……



~~正漢字・
歴史的
かなづかひ~~
(本誌はこちらが原則)

新漢字・
現代
仮名遣い

どちらもパソコンで自己出版